



(1999年11月1日～2000年4月30日) No.42

福井捷朗教授が退官

福井捷朗教授は、1967(昭和42)年4月に東南アジア研究センター助手に就任されて以来、1969(昭和44)年5月から約5年間、京都大学農学部に所属された期間を除いて、一貫して東南アジア研究センターにおいて研究・教育活動に励まれてきました。そして所員にとっては誠に残念なことでありますが、定年まで2年を残して、2000(平成12)年4月から大分県別府市に新設された立命館アジア太平洋大学に移られました。

30年以上に及ぶ先生のご研究の足跡をたどれば、当初は「緑の革命」や気候変動の視点から農業生産そのものを対象とした研究を展開されました。ついで先生のご興味は農業生産を支える生活実態へと広がります。すなわち東北タイの一村落を対象とした長期滞在型共同研究を組織され、社会科学諸分野をも取り込んだ研究活動を開拓されました。その成果は東北タイ土地・人口論に結実されます。さらに先生のご興味は歴史的な深まりを求め、この数年間は、歴史学者や考古学者と共同して、東南アジアのドライエリア研究を強力に推進されています。つねに新しい研究トピックや研究手法にチャレンジする精神は、われわれ後輩にとってまさに学ぶべき姿勢であるのみならず、地域研究のあるべき姿を体現されていると言っても過言ではありません。

2月24日の所員討論会において、ご研究の最新の成果であ



所員討論会で発表される福井教授

る「東北タイにおける天水田の発生」について先生に話題提供をしていただきました。多数の教官や大学院生に深い感銘を与えていただきました。またそれに引き続いて、福井杯争奪ボーリング大会とパーティーが開催されました。こちらはセンターを支えてくれている事務職員やアルバイトのみなさんが多数参加しました。懐かしい旧職員の方々にもご参加いただきました。先生ご自身が東南アジア各地で収集された賞品が授与され、先生のお人柄そのものの、わきあいあいとした送別の場となりました。

4月以降は新天地で、これまでも増して、ご研究を展開、深化させていかれることと思います。またアジア諸国から集まってくる学生にご熱心な教育をされるものと思います。ますますのご発展をお祈り申し上げます。

(文責：河野泰之)



カンボジア トンレ・サップ湖畔にて

その他の主な内容

拠点大学セミナー	(2)
応地教授退官	(3)
人事・出版ニュース	(4～5)
COE だより・佐藤写真コレクション	(6)
共同研究活動報告	(7)
東風南信	(8)
海外調査だより	(9)
Visitors' Views・研究会報告	(10～13)
Colloquium	(14～15)
人の動き・連絡事務所だより	(15～16)

福井捷朗

残る思いはふたつあります。ひとつは、継続性、もうひとつは、無国籍化です。

センターは、東南アジアという地域に特化した地域研究機関であることに最大の意義があると考えます。「友人を選ぶことはできるが、隣人を選ぶことはできない」といわれます。日本にとって東南アジアは隣人です。したがってセンターにおける東南アジア研究は、植民地政策がらみでのヨーロッパにおけるかつての東南アジア研究とも、東西冷戦構造を前提としたアメリカにおける東南アジア研究とも違います。日本と東南アジアの隣人たちとの付き合い方は時代とともに変わるでしょう。地域研究の方法論も進歩するでしょう。地域比較、地域間交流も有意義でしょう。しかし、東南アジアが隣人であることに変わりはありません。日本人にとって東南アジア地域研究は、この意味で、世界の他の地域を対象とした地域研究とは異なります。ここにセンターがあくまで地域に特化することに意義があります。センターは、少なくとも日本における東南アジア研究の継続性を数百年の時間単位で考えるべき立場にあると思います。

とはいえ、研究機関としての外形は変化せざるをえないことでしょう。大学の一研究機関でありつづける必要もなければ、それがつねにもっとも望ましいとは限りません。

複数地域を対象とする研究機関の一部となることもあるかもしれませんが、これまでのセンターにおける東南アジア研究と、それが所有する資料は、絶対に継承されねばなりません。

世界のどの地域であっても、当該地域を対象とする地域研究の中心は、地域内にあるのが当然です。エジプト研究の中心がヨーロッパにあったり、南米研究の中心がアメリカにあるのは、本来は不自然な話です。同じように東南アジア研究の中心がイサカや、ロンドンや、京都にあるのも不自然です。しかし発展途上地域を対象とした地域研究では、地域研究とは先進国側が途上国側を研究するという暗黙の了解が成立していました。この了解を世界で初めて破りそうなのが東南アジアです。域内の東南アジア研究の兆は日に日に強くなりつつあります。そのとき京都のセンターはいかなる存在理由をもつのでしょうか？東南アジアを日本人向けに紹介するだけの責務を担うことになるのでしょうか？それに満足できないなら、域内、域外の研究者に伍して東南アジア研究の最先端を走りつづけるにはどうしたらよいのでしょうか？

国民国家の成立以前から大学は存在しています。学問研究は、本来的に無国籍的であります。19世紀半ば以降の国家のための大学は、人類史における一時的な現象であると考えます。国立大学のエイジェンシー化を奇貨として、無国籍的な本来の学問研究に立ち戻ることに、日本人による東南アジア研究の将来があるものと考えます。

日タイ拠点大学セミナー バンコクで開催

2000年3月10 - 11日、バンコクのタマサート大学にて日タイ拠点大学交流プログラムの一環としてJSPS-NRCT Workshop: The Future of Southeast Asian Studiesを開催した。ワークショップには日本からは阿部、白石、アピナーレス(以上、東南アジア研究センター)、濱下、末廣(以上、東京大学)、鳥居(明治大学)の6名が出席し、さらにタイ以外の東南アジアの国々からシャハリル・タリッ(マレーシア大学)、スミット・マンダ(マレーシア国民大学)、エドゥアルド・タテム(フィリピン大学)、ヴェディ・ハフィズ(シンガポール大学)の4名が招待された。会議においてはまず午前中、「東南アジア研究の将来」をテーマにチャルンヴィット(タマサート大学)と白石が報告、クリス・ベイカーが討論者をつとめた。ついで午後には現在進行中の共同研究、「ヘゲモニーとテクノクラシー」「ネットワークの比較史」「国家、市場、社会、地域協力」の三つのテーマについて、白石、末廣とパスーク(チュラロンコン大学)、濱下とチャルンヴィット、バヌボン(タマサート大学)と阿部がそれぞれ報告し、活発な討論が行われた。11日午前のセッションは自由討論に当てられた。

あたりまえのことであるが、「東南アジア研究の将来」というテーマはいくら議論したところで答えは出ない。そうしたテーマを今回のワークショップで取り上げたひとつの理由は、折りからタマサート大学に東南アジアプログラム



が設立され、このテーマがタマサート大学でワークショップを開催するにあたり時宜に適ったテーマであるということがあった。しかし、それにしても、東南アジア研究の中心がもはや東南アジアに移ったこと、そしてこれに応じて、これからの東南アジア研究、教育において東南アジアの東南アジア研究者、研究センターとのネットワーク作りのきわめて重要なことが確認された。

また三つの共同研究については、報告と討論によって、ヘゲモニー、テクノクラシー、ネットワークなどの概念がおよそどのような意味をもつものとして使われているか、またこうした概念をツールとすることでどのような現象の分析が意図されているのか、これについての参加者の理解を深めることがワークショップの趣旨であり、これはかなりの程度、達成できたと思われる。

(文責：白石 隆)

応地利明 A・A 研究科教授退官

初めて応地先生のお名前を耳にしたとき、「王子先生」なのかと思った記憶があるが、その後実際に品のよい先生に接して、そのお人柄を知るにつれて、プリンスのような先生だという思いが強くなった。しかし、ソフトな印象、優しいお人柄の陰には、フィールドワークにおける強靱な体力と徹底した探求心、学問における厳しい姿勢をお持ちの先生である。

応地利明教授は、京大文学部のご出身で、同学部でも長らく教鞭をとられたが、6年前に東南アジア研究センターにお移りになった。さらに、センターを母艦としてアジア・アフリカ地域研究研究科 (A・A 研究科) が飛び立つと、連環地域論講座の教授として2年間お勤めになった。残念なことであるが、今回、定年まで1年を残してご退職なさることになった。

A・A 研究科は応地先生が中心となって企画し、設立された新しい独立研究科であるが、「連環地域論」という不思議な講座名も応地先生の命名である。「連環」とは「連なる / 結ぶ環」で、東南アジアとアフリカの間にあって両者をつなぐと共に、自分自身も「環」として自立している地域を指す。具体的には、ヒンドゥー世界、イスラーム世界、あるいは南アジア地域、西アジア地域を言う。応地先生は、こ



最終講義をされる応地教授

の新しい研究科、講座に非常に愛着があると、よくおっしゃっているが、南アジア地域研究を専門とするセクションを作ることができたことも大きな貢献であろう。

もっとも、応地先生の研究は、広い視野に立つ地域間比較が特徴で、単に南アジアにだけこもっていたわけではない。西アフリカ農業の調査は言うまでもなく、先生の研究対象と主題は、「最終講義」でご自分の研究の来し方を披露された中で、縦横に広がる雄大さが明らかにされた。最終講義は、センター東棟2階講義室で行われたが、満杯の聴衆が実に楽しく、かつ含蓄のあるお話をうかがうことができた。院生も多数参加していたが、まさに「フィールドワークの鉄人」というにふさわしい応地先生の実体に、若い皆さんから驚きと賞賛の声が聞かれた。講義の演題は「要約すれば --- 牛歩回顧」であったが、実際の内容に即するならば「虎跳回顧」だったのではないだろうか。

京大会館で行われた祝賀会にも、非常に多くの方がご参加くださり、さらに2次会のカラオケ大会まで、楽しい時が共有された。幹事として、ご参加、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。応地先生には、仕事の間は変わっても、地域研究の発展のためにますますご活躍いただきたいものである。 文責：小杉 泰 (A・A 研究科)



祝賀会にて

ジャカルタ連絡事務所移転

ジャカルタ連絡事務所が移転しました。

新しいオフィスの前には、いくつもの花屋が軒を並べています。窓をあけると、あざやかな色彩とともに、あまい香りが舞い込んできそうです。

Address: Jl. Kartanegara No.38, Kebayoran Baru, Jakarta Selatan 12180, Indonesia

Tel. No.: + 62-21-7262619

Fax. No.: + 62-21-7248584



矢野暢元センター所長逝去

矢野暢東南アジア研究センター元教授が、去る1999年12月14日ウィーンで亡くなった。享年63歳。矢野教授は、1972年助教授としてセンター着任、1978年教授に昇任、1993年12月退職された。この間1990年4月～1993年8月センター所長を務められた。著書に『タイ・ビルマ現代政治史研究』(東南アジア研究叢書2 1968)『冷戦と東南アジア』(中央公論社 1986)など多数あり、また『講座 東南アジア学』(全11巻、弘文堂 1992)など多くの編著をものにされた。

ご冥福をお祈りします。

< 所長再任 >

立本成文教授が、4月1日東南アジア研究センター所長に再任された。任期は2002年3月31日まで。

< 新任 >



松林公蔵教授

(2000年1月1日付)。1950年5月28日生。77年3月京都大学医学部卒業。87年1月京都大学医学博士。静岡労災病院、天理よろづ相談所病院、今給黎総合病院、京都大学附属病院神経内科を経て86年高知医科大学老年病科助手。91年同講師。98年同助教授。

〔主要論文〕

「加齢とエコロジー --- フンザカラコラム医学調査から」『学術月報』47, 1994. (共著) 「インカの里びと」『インカの里びと --- 高知医大アンデス医学調査隊の記録』高知医大フィールド医学研究会 (編) 高知新聞社, 1995. Secular Improvement in Self-care Independence of Old People Living in Community in Kahoku, Japan. *Lancet* 347, 1996. (共著)



濱下武志教授

(2000年4月1日付)。1943年11月20日生。72年東京大学文学部東洋史学科卒業。78年東京大学大学院人文学研究科東洋史博士課程単位取得退学。香港大学研究助手、東洋文庫奨励研究員を経て、79年一橋大学経済学部専任講師、81年同助教授。82年東京大学東洋文化研究

所助教授。89年同教授。96～98年同所長。

〔主要著書・論文〕

『朝貢システムと近代アジア』岩波書店, 1997. 「海と国家」『へるめす』55, 1995. The Intra-regional System in East Asia in Modern Times. In *Network Power: Japan and Asia*, eds. by Peter J. Katzenstein and Takashi Shiraiishi. Ithaca: Cornell University Press, 1997.



速水洋子助教授

(2000年4月1日付)。1959年2月20日生。81年3月国際基督教大学教養学部社会科学科卒業。92年5月ブラウン大学Ph.D.取得。83～85年、91年ブラウン大学人類学部 Teaching Assistant。96年東南アジア研究センター助手。98年京都大学大学院A・A研究科助手。

〔主要論文〕

「北タイ山地における仏教布教プロジェクト --- あるカレン族村落群の事例」『東南アジア研究』32(2), 1994. Motherhood Redefined: Women's Choices on Family Rituals and Reproduction in the Peripheries of Thailand. *Sojourn* 13(2), 1998. 「タイ国家の領土におけるカレンの土地権 --- 共同性と伝統の構築」『土地所有の政治史 --- 人類学的視点』杉島敬志 (編), 風響社, 1999.



木谷公哉助手

(2000年4月1日付)。1975年8月30日生。98年3月京都産業大学工学部情報通信工学科卒業。2000年3月同大学大学院研究科情報通信工学専攻修士課程修了。

〔主要論文〕

「京都産業大学災害時避難者データベースの構築」1997. 「動画画像の再構築」修士論文, 2000.

< 国内客員部門 >

杉島敬志国立民族学博物館教授と黒田景子鹿児島大学助教授が再任された。任期は2001年3月31日まで。

外国人研究員



・Roengsak Katawatin (タイ)。コンケン大学農学部講師。招へい期間1999年12月9日～2000年6月8日。研究題目「人工衛星画像解析による東南アジアの土地資源評価」



・Sukanya Nitungkorn (タイ)。タマサート大学経済学部助教授。招へい期間1999年12月14日～2000年12月13日。研究題目「タイにおける教育改革」



・Aris Poniman (インドネシア)。天然資源調査センター長。招へい期間1999年12月21日～2000年6月20日。研究題目「インドネシアにおける海岸地域の土地利用の研究」

『東南アジア研究』37巻3号

「タイ北部における農村縫製業と手織物業をめぐる市場形成」大野昭彦；ベンジャ・チラパトビモール 「1820年代ジャワ島プリアンガン地方における開拓社会 --- グデ山南麓を事例として」大橋厚子 「発酵保存食品チャオの生活誌 --- マカッサル海峡B島における生業活動の変化」浜元聡子 Organized Chinese Transnationalism and the Institutionalization of Business Networks: Singapore Chinese Chamber of Commerce and Industry as a Case Analysis. Hong Liu A Study on Estimation of Cassava Area and Production Using Remote Sensing and Geographic Information Systems in the Northeast Region of Thailand. Apisit Eiumnoh; Rajendra P. Shrestha 書評 Henk Schulte Nordholt, ed. *Outward Appearances: Dressing State and Society in Indonesia*. 加藤 剛 現地通信

「バリ銀行スキャンダル」水野広祐

『東南アジア研究』37巻4号

A Dynamic Bumiputera Commercial and Industrial Class?: A Mismatch with Market Rationality. Lrong Lim Transforming Interaction of the Local People with the Uplands: A Case Study in Southeastern Nueva Ecija, Central Luzon. Atsuko Hayama Indo-nesian Forest Management Problems: What Are the Comments and Opinions of the Groups and Organizations Concerned? Adi Djoko Guritno 「西ジャワにおける『地方芸術』探求活動 --- 新たな芸術教育の確立」福岡まどか 「1950年代におけるアラカン人仏教徒議員の新州設立要求」齋藤瑞枝 「食物をめぐる人と自然の関わり --- 東北タイでの事例から」藤田 渡 書評 M.J.C. Schouten. *Leadership and Social Mobility in a Southeast Asian Society: Minahasa, 1677 - 1983*. 前川佳遠理 現地通信「国際図書館連盟 (IFLA) バンコク大会に参加して」北野康子

出版ニュース

地域研究叢書9 - 12

坪内良博 (編) .2000 .『地域形成の論理』京都大学学術出版会 .

原洋之介 (編) .2000 .『地域発展の固有論理』京都大学学術出版会 .

加藤久美子 .2000 .『盆地世界の国家論 --- 雲南、シブソバンナーのタイ族史』京都大学学術出版会 .

林 行夫 .2000 .『ラオ人社会の宗教と文化変容 --- 東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会 .

研究報告書シリーズ

Vasin Chooprayoon. 2000. *Library Acquisition List: Thai Materials*, No.17 (March 2000).

----- . 2000. *Thai Material Database Management System in the Library of the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University*.

<その他の出版物>

白石 隆 .1999 .『崩壊インドネシアはどこへ行く』NTT出版 .

吉原久仁夫 .1999 .『何が経済格差を生むのか』NTT出版 .

----- .1999 .『東南アジアで良くなる国・悪くなる国 --- エルザッツ資本主義のゆくえ』東洋経済新報社 .

Yoshihara Kunio. 1999 . *Building a Prosperous Southeast Asia*. Curzon.

Shigeyuki Abe(co-ed.) 1999. *Asia-Pacific Economic Linkages*. Pergamon.

田中耕司 (編) .2000 .『自然と結ぶ --- 「農」にみる多様性』(講座・人間と環境3) 昭和堂 .



・ Donna Jeanne Amoroso (アメリカ合衆国)。元ライト州立大学准教授。招へい期間2000年2月18日～2001年2月17日。研究題目「マレー諸王国の運命・その比較史」



・ Che Puteh Ismail (マレーシア)。マラヤ大学図書館ザバ記念館館長。招へい期間2000年3月24日～9月23日。研究題目「マレー語および文学：書誌」

招へい外国人学者

・ Pasuk Phongpaichit (タイ)。チュラロンコン大学経済学部准教授。1999年10月18日～11月1日。「ヘゲモニーの構造 (仕掛け) --- テクノクラシー」

・ Mohd. Taib HJ. Dora (マレーシア)。マレーシア工科大学経営・人的資源開発部講師。1999年10月20日～11月28日。「都会の貧困撲滅に関する比較研究 --- 日本とマレーシアの場合」

・ Trisilpa Boonkhachorn (タイ)。チュラロンコン大学教養学部タイ文学科助教授。1999年10月20日～11月7日。「ヘゲモニーの構造変化 (ネットワークの比較史)」

・ Sriprapha Petcharamesree (タイ)。マヒドン大学大学院研究科講師。1999年11月16日～11月30日。「ヘゲモニーの構造 (仕掛け) --- テクノクラシー」

・ Julaporn Euarukskul (タイ)。タマサート大学教養学部助教授。1999年11月20日～12月19日。「ヘゲモニーの構造 (仕掛け) --- テクノクラシー」

・ Pisit Boonchai (タイ)。マハーサラカム大学東北芸術文化研究所主任研究員。1999年11月22日～12月11日。「漢方薬に関する日本人の意識と暮らし --- 比較研究」

・ Suporn Katawatin (タイ)。コンケン大学農学部助教授。1999年12月9日～2000年6月8日。「東南アジアにおける畜産を組み込んだ農業的土地利用の展開」

・ Charnvit Kasetsiri (タイ)。タマサート大学教養学部講師。2000年3月13日～27日。「プリディ・パヨンの人生と仕事」

えらく元気のいい標題を掲げて、今回の「COEだより」をお届けすることにした。前号の「ニューズレター」(No.41)では、COE(中核研究拠点形成プログラム)にふさわしいインフラ整備を担当する図書、画像資料、ネットワークなどを担当する3つのワーキンググループの活動を紹介したが、今回は、実際の研究活動を担う「東南アジア」「南・西アジア」「アフリカ」の3研究クラスターの活動について紹介する。

このプロジェクトの目的は、簡単に表現すれば、地域の成り立ち(The Making of Regions)について先端的で知的刺激、洞察力に富んだ研究を行い、アジア・アフリカの地域研究者であればだれでも一度は訪れてみたい、そこで研究してみたい、そう思うようなアジア・アフリカ地域研究の世界的な中核研究拠点を作ることにある。そのためには、少なくとも次のような条件を満たす必要がある。

1. 地域研究のもつ可能性やこれから進むべき方向を示す先端的で知的刺激、洞察力に富む研究が現に行われていること
2. そうした研究を支える研究体制、とくに文献資料をはじめとする情報資源が整備されていること
3. そうした研究の成果が出版物など目に見えるかたちで公開されていること
4. 世界の地域研究者の交流のひとつの中心となること

以上のような条件を満たすために各研究クラスターでは、(a)自然環境、(b)物質文化と民族・社会・文化、そして(c)国家と世界システムの3つのレベルでの研究活動を実施し、通常、わたしたちが「東南アジア」「南アジア」「西アジア」「アフリカ」などと呼ぶ地域がそれぞれどのような構造的特徴をもっているのか、こうした地域がたしかに地域と呼びう

るとすればそれはどのような意味においてか、などの問題を明らかにしようとしている。あわせて文献資料や地図・画像資料の収集、各地の地域研究者・研究機関との交流推進・研究ネットワークの構築に取り組んでいる。

第1年度から組織的な文献資料の収集作業が行われ、すでに第2年度までに3万冊余りにおよぶ図書が購入されている。各地域の書店から直接購入するシステムも整って、研究分担者・協力者の臨地調査と併行して、これからも体系的な収書が進められる予定である。研究ネットワークの構築については、センターおよびアジア・アフリカ地域研究研究科を結ぶ機関内部の情報インフラの整備と、センターと国外の研究機関とのネットワーク構築や情報・人物交流が進められている。後者を推進するためにワークショップやセミナーを内外で開催しており、東南アジア地域研究に関連しては、Asian Ecotechnology Network構築のためのワークショップや、「西南中国と東南アジア大陸部における跨境民族文化の動態 --- 関係・社会・言語」と題するワークショップが国外で、そして「東南アジアの生態」「支配の制度と文化」など多数の研究会が開催されている。

以上のような研究活動を将来どういう形で公開していくかがこれからの課題である。日本語・英語での出版活動を具体化するための検討がすでに始まっており、東南アジア諸言語で発表されている研究報告の英語版紹介雑誌など、意欲的な企画もそのなかに含まれている。

プロジェクトが終わるこれから3年後に「世界的なセンター」と認知されるようになっていくかどうか、プロジェクトの正念場となる第3年度をまもなく迎えようとしている。(文責：田中耕司)

佐藤多紀三写真コレクション寄贈される

写真家佐藤多紀三氏は、従軍カメラマンとして東南アジアに出かけて以来、戦後もあまり人々が訪れることのなかった東南アジアの「奥地」にまで足を延ばし、各地の自然・文化・生活にかかわる貴重な写真を撮り続けてこられました。『インドネシア民族文化』(雄山閣出版、1986)の著者として、あるいは『毎日グラフ』や『ザ・ステータス』に掲載された写真を通じて、氏のお名前をご存じの方も多いかと思えます。ところが、その佐藤氏が亡くなられ、大量の写真類が残されることになったため、昨秋、ご遺族からこれを東南アジア研究センターへ寄贈したいとの申し入れがありました。生前から、佐藤氏はこの写真類を東南アジアの研究や教育に役立ててくれる機関に寄贈したいという希望を持っておられたそうです。

それを受けて、早速、当時の資料部長阿部教授がその写真を保管されていた佐藤氏の甥の小野瑞樹氏を訪ね、残された資料類がセンターにとって大変貴重なコレクションとなることを確認し、センターとして正式に寄贈を受けることになりました。佐藤氏の妹の小野浩子氏から12月に寄贈された資料は、スライド約2万点、写真約1万5千点、ネガフィルム約1万点で、インドネシア各地を中心にフィリ



ありし日の佐藤多紀三氏。シンガポール植物園にて。

ン、南太平洋諸国におよんでいます。

寄贈された資料は、ちょうどセンターが進めているフォト・ライブラリー構築プロジェクトのもと「佐藤コレクション」として整理中です。現在、ほぼ全てのスライド・フィルムがデジタル化され、写真のデジタル化も進行中です。この貴重な資料をできるだけ広く活用いただけるようセンターホームページでコレクションを紹介していく予定です。

ご寄贈いただいたご遺族の方々に紙上をかりてあらためてお礼申し上げます。

・「フロンティア社会の地域間比較研究」研究会

この研究会は、フロンティアの概念展開、形成過程、地域性を地域間比較によって検証することを目的とし、文部省科学研究費補助金基盤研究B採択のプロジェクトの一環として行われている。第4回の研究会ではアメリカにおけるフロンティア学説と概念の展開が、第5回は東南アジアのフロンティア社会の再編過程が話題として提供された。

第4回研究会：1999年12月23日（於慶應義塾大学）

「フロンティア --- アメリカ合衆国史研究の立場から」小塩和人（日本女子大学） 「ポール・ゲイツの夢 --- あるフロンティア史家の肖像」岡田泰男（慶應義塾大学）

第5回研究会：2000年2月25日（於センター）

「ナマコ資源の多様性」赤嶺淳（学振特別研究員／国立民族学博物館） 「海域の系譜 --- 西セレベス海における人口移動とフロンティア」長津一史（学振特別研究員／センター）

「コメント --- 東南アジアフロンティア論と海域世界」立本成文（センター）

・「実践仏教の諸相 --- テキスト・コンテキストの地域間比較」研究会（共同研究『民族間関係・文化再編・移動』）

西南中国を含む東南アジア大陸部上座仏教文化圏での宗教実践の地域的諸相を解明するために、民族、国家、都市、ジェンダーを主題にしつつ、テキスト（経典）の存在と運用をも一実践として捉えて地域間比較を試みた。

1月22日「開催主旨説明」林 行夫（センター） 「ビルマ実践宗教研究再考」高谷紀夫（広島大） 「ビルマ語で翻訳編纂された仏教典籍について」原田正美（大阪外大） 「シャン仏教における民間知識人チャレと教義解説書リーク・ロンの役割：タイ北部のタイ・ヤイの事例」村上忠良（学振特別研究員） 「正法久住：仏教と聖遺物崇拜」入澤 崇（龍谷大） 「東南アジア上座仏教文化圏における『身体』と『テキスト』」林 行夫（センター） 「タンマカーイ寺信徒における社会観と自己」矢野秀武（東大）

1月23日「俱生神の展開」長尾佳代子（桃山学院大） 「タイとカンボジアにおける『尼になる』という選択」高橋美和（愛国学園大） 「上座部仏教圏周縁の少数民族における宗教の動態」速水洋子（京大）、イサラー・ヤーナータン（名大） 「上座部仏教と周縁社会の動態：中国雲南省・徳宏地区、タイ・ヌーの事例」長谷川清（岐阜教育大） 「総合討論」ディスカッサント：櫻井義秀（北大）、馬場雄司（三重県立看護大）。

・"Relations between Environment and Development in the Mountains of Northern Vietnam and Thailand"

この国際セミナーは、2000年2月14日センター主催で行なわれた。本セミナーの目的は、北ベトナムとタイの山地部をとりあげ、開発と環境の問題に対してバランスのとれた議論のできる場を提供しようとするものであった。国内外から、人類学、経済学、農学の諸分野5人の研究者に話題提供をお願いした。発表題目は、"Development Trends in Vietnam's Northern Mountain Region" Le Trong Cuc（ベトナム国立大学）および Terry Rambo（センター外国人研究員）、"People in Between: Conservation and Conversion of Forest Lands in Thailand" 佐藤 仁（東京大学）、"Policy Impacts on Environmental Resource Management: A Case

Study of Deforestation in the Northern Hill Region of Vietnam" 橘 永久（北海道大学）、"Agricultural Diversification in the Mountainous Areas of Northern Vietnam" 柳澤雅之（センター）であった。地域の開発と環境の相克はそれぞれの地域特有の様相を呈すると同時に、世界規模の開発や環境政策にも影響されるため共通の現象も見られる。具体的な方策についての深い議論には至らなかったものの、学際研究や地域間比較研究を駆使してセンターが開発と環境の問題に貢献できる点は多々あると思われる。

・「農村開発における地域性と環境問題」共同研究会

昨年度まで継続的に実施してきた「農村開発における地域性」を、今年度からは環境問題をも視野にいれた研究会に発展させた。

第5回（2月12日）「参加型開発の展開と今日的意義」斎藤文彦（龍谷大）

第6回（2月22日）「参加型農村研究・開発手法：FSRE（Farming Systems Research and Extension）の概要と最近の動向」横山繁樹（農業総合研究所） 「アメリカおよびヨーロッパにおける持続型農業研究：土地利用型作物の場合」長谷川浩（東北農業試験場）

第5回では、この10年来注目され続けている参加型開発について、アジア、アフリカのUNDPの現場で数年間開発計画に携わった斎藤文彦氏が、行政機構の地方分権化、経済システムの市場経済化、市民社会による共同体活動と、この3つの領域への人々の「参加」、そして3領域の相互関係について報告を行った。

第6回には、ファームング・システム研究と持続的農業の発信源であり、現在も活発に議論の展開とアプローチの模索がつづくアメリカ合衆国での研究動向を踏まえ、アジアの開発途上国で脚光を浴びてきているファームング・システム研究アプローチの展開、持続的農業への圃場実験に基づき農業技術的アプローチについて報告があった。

・「環ヒマラヤ広域圏における生態資源利用の比較地域間研究」研究会

この共同研究は、2000年度からの科学研究費の助成を申請中の共同研究計画であるが、しばらくこのテーマに沿って研究会をもつことになった。このテーマの骨子は、ヒマラヤを中心にして周辺の東南アジア、南アジア、西南アジア、およびチベット、モンゴルの5つの大生態系における生態資源利用の比較研究である。

2月16日に開催されたセミナーの発表は以下のとおりであった。

「イランキャピール砂漠東縁における土地・水利用を中心に」原 隆一（大東文化大学）

イランの乾燥砂漠において、水を中心とした土地利用の実態について、キャピール砂漠を舞台に、周辺の乾燥地帯を含めた土地利用形態について論じた。

「内蒙古ムウス砂地の人と自然の問題 --- 砂漠化の実態とは？」小林達明（千葉大学）

中国黄土高原の北に位置するムウス砂地において、10年にわたる砂漠緑化とその問題点について論じた。

上記二つの議題提供をもとに、環ヒマラヤ各地の生態系の状況について総合討論を行った。

地域研究の功德

石井 米雄



Canaliserというフランス語の動詞がある。辞書をひくと「運河化する」とあり、「ある地域に運河をつける～ une région」などという例文が見える。しかしこの動詞が必ずしも「運河」に限定されていないことは、もうひとつの語義として「(一定方向に) 集中する、整理する」という説明が加えられていることから知られる。

語根の canal は、もともと「管」「樋」「みぞ」という意味だ。いずれもなにかに方向を与える仕掛けである。ここから「努力を(分散させずに一点に) 集中させる = diriger ses efforts」などという用法がうまれる。

唐突にこんな話を持ち出したのは、最近カンボジアのタケオを訪れて、マレレの報告書で一躍世界にその名を知られることになった、「扶南」の港オケオと、アンコルボレイを結ぶ長大な「運河 canal」が「掘られて」いたという自然環境を実見する機会に恵まれ、これまで「運河 canal」についてもっていたイメージが吹き飛ばされる経験をしたからである。

プノンペンでの説明では、アンコルボレイへはまずタケオまで出て、そこから舟に乗るとのことだった。おそらく橋のない川があってアンコルボレイはたぶんその対岸に

あるのだろうと想像していた。だからその舟が数十分もかかるという説明がどうにもふにおちなかった。この疑問は、タケオを訪れてみて瞬時に氷解した。なんと、タケオから先は一面の水。水深は浅いにせよ、まるで海である。カンボジア語ではこれはstungだと聞いて、これまた仰天した。どの辞書にも、stungの意味は「川」と書いてあるからである。これはぜったい「川」ではない！

それはさておきとして、こことオケオを結ぶ「運河」とはいったいなんなのか。「運河」が大地に水をひき、あるいは水を排出する構造物であるとしたら、そんなものがどうしてここに存在するの必要があり、また存在しうのか。にもかかわらず、われわれは不思議な構造物が、つい最近まで嘗々と構築されていた証拠を見せられた。巨大な水のまんなかに、土を盛りあげて、舟のとおりまっすぐな「道」がつくられているのである。われわれの舟もまた、この広い水面ならどこへ行ってもよさそうなものなのに、律儀にその「水路」にそって走っていった。もしかすると、マレレが航空写真で確認した「運河」とは、このような構造物ではなかったのだろうか。つまり、それはあてどなく広がる巨大な「大海」を行く舟に、方向をしめすための水路だったのではあるまいか。

歴史学者はひたすら文献を精密に読むことに専念する。しかし百読してもまったく理解できないことが、一見しただけでただちに読み方を反省させられることがある。地域研究の功德というべきか。

(1965.7 ~ 90.3 東南アジア研究センター助教授・教授。85.4 ~ 90.3 センター所長。現在神田外語大学学長)

東風南信 REFLECTIONS

Southern Philippines and Southeast Asia

Patricio N. Abinales

For almost 80 years now, academics and community leaders in the second largest island of the Philippines, Mindanao, have complained about how Manila, the capital and seat of the national government, has consistently ignored the south. The grumblings over metropolitan inattention were mainly economic, although after 1972, they became more political as a result of the devastating consequences of two rebellions, one Islamic separatist, the other communist, on the people of the island.

It was no wonder then that in the recent workshop for a Mindanao Studies Program at the University of the Philippines-Mindanao campus two weekends ago, the initial discussion was very much shaped by the above complaints.



But there was also a notable change in the tone of the deliberations. The participants agreed that while continuing to criticize Manila was necessary, it was equally important that they alter their perspectives towards the broader and more receptive Land below the Winds.

This new view, I think, signals the beginning of what may be a paradigm shift in the manner in which Mindanao's academics and public intellectuals view the culture, history and politics of their home island. It represents a long-delayed recognition of a regional history that had long been marginalized by a narrower national narrative determined mainly by the capital's intelligentsia. Mindanao's story has ceased to be merely local. This group now sees its historical moorings in the wider economic, political and cultural region that is Southeast Asia.

This awareness likewise brings Mindanao academics and public intellectuals in harmony with parts of the island society already linked to the region. Everyday life in Mindanao's southern provinces has always been heavily colored by a Southeast Asian hue. Maguindanaos and Joloanos regularly trade with Ambonese, Bataks and Ma-

Kemena River Basin: Inland to the Coast, Past to the Present

Noboru Ishikawa

In February and March this year I conducted research in Bintulu, Sarawak, East Malaysia. It was the first phase of my three-year project on the social history of the Kemena River basin. By focusing on the riverine society that encompasses Belaga in the interior and Bintulu town on the coast, the research intends to analyze, in a historically informed way, the movement of people and commodities as well as the dissemination of ideology along the river. While laborers and commodities are lured and brought down-river to Bintulu town, the state has significantly strengthened its grip over the interior and forced the integration, which adversely resulted in the socio-economic displacement of up-river communities.

One of my objectives is to look into facets of the social mobilization and ideological construction of labor in the industrial sector of Bintulu town, which has absorbed a substantial number of workers from the interior and across the national border. Within two decades, Bintulu, where the Kemena meets the South China Sea, has been transformed from a sleepy fishing village of 5,000 inhabitants to

laysians, while Filipinos work in the timber companies of Sabah and Sarawak. Over 15,000 Indonesians reside in Mindanao's Cotabatao and Davao provinces, while Filipinos in the Sulu archipelago vote for their mayors and then listen to Malaysian tele-novellas.

By looking at Mindanao conceptually as part of South-east Asia, Mindanao's intellectual community has therefore found a way out of the 80-year impasse with Manila. As an observer in that proceeding, and as a native of Mindanao, my hope is that this turning of one's back away from the capital towards the region will bring good fortunes to my home island.

Patricio N. Abinales was recently invited by the Office of the President of the University of the Philippines to participate in a workshop on the possibility of creating a Mindanao Studies Program at the University of the Philippines-Mindanao campus in Davao City, southern Philippines.

(Associate Professor of CSEAS)

a highly industrial town with 120,000 Sarawakians, more than 20,000 Indonesian workers as well as Asian and Western expatriates. Since the late 1970s, a huge labor market has been deliberately created there under the state development policies financially supported by massive multinational investments. Down-stream timber-based industries such as sawmills and plywood manufacturers, coastal petrochemical industries such as LNG, urea/ammonia and silica plants, and inland oil palm and rubber estates, have provided employment for people of diverse ethnicity, nationality, skill levels and educational background.

The Kemena basin, once rich in jungle produce such as natural rubber, rattan and iron wood, has become a provider of logs and manpower. Communities there reflect ethnic diversity of Sarawak. The Malay, the Melanau, the Vaiee Segan, the Iban, the Chinese, the Orang Ulu and the Penan live side by side along the 100 km-long Kemena and its tributaries. I visited communities in the interior and observed the marginalization of local agriculture in villages and longhouses where men and women left for wage labor. I also went to sawmills and plywood factories where local and foreign workers are mobilized and differentiated according to their national and ethnic affiliation.

I am particularly interested in the power relations in such a plural society transformed and transforming itself under the colonial as well as postcolonial conditions. My journey along the Kemena River is one across time; as I travel from the interior to the coast, I also traverse the history of Sarawak from the past to the present.

(Associate Professor of CSEAS)

< 事務官人事 > (4月1日付)

佐野重信事務長は大型計算機センター等事務長に配置換。後任に山本照雄経理部経理課課長補佐。

中山圭史庶務掛長は総務部総務課総務掛長に配置換。後任に白波瀨昌廣放送大学学園京都学習センター事務係長。

野村茂教務掛長は学生部教務課専門職員に配置換。後任に津知哲夫総合人間学部・人間・環境学研究科全学共通科目掛長。

石田義則会計掛主任は奈良先端科学技術大学院大学総務部会計課用度係主任に配置換。後任に岩手利之総合人間学部・人間・環境学研究科庶務掛主任。

< センター来訪者 >

12月3日 Prof. Leslie Gunawardana (ペラデニア大学学長 (スリランカ)) 12月13日 Mr. Mukhlis Paeni (国立公文書館館長 (インドネシア)) 1月17日 李玉氏 (北京大学アジア・アフリカ研究所所長) 3月16日 Prof. Richard Robinson (マードック大学教授 (オーストラリア))

HOM MALI RICE: A PROMISING CASH CROP OF NE THAILAND

By Roengsak Katawatin



Rice is the most important crop for the society and economy of Thailand. The entire Thai population, regardless of income, consumes rice as the staple food. Sufficiency in this crop is always the farmers' most important production objective. Rice is also the top export crop of Thailand, which is the world's major exporter.

Each year, the amount of foreign currency earned from this crop is among the highest of the country. It is believed that a strong rice sector has played, and will continue to play, a significant role in economic recovery and in alleviating other poverty-related problems of this country.

It is estimated that Thailand accounts for approximately 4% of the world rice production with a substantial export share of 30% in the world market. Roughly 9 million hectares of rice is planted to produce 13-15 million tons of milled rice per year. Of this, 4-6 million tons are exported, and more than a quarter of the export is a high quality rice variety named Hom Mali.

The importance of Hom Mali has been rising drastically for at least two reasons. First, demand has been growing due to increasing consumer preference for high quality rice, especially in the world market. Thus, Hom Mali commands the top market price. Secondly, it was predicted that in the future Thailand might not be able to compete in low-quality rice export markets with other countries where labor is cheaper.

Hom Mali, or Jasmine, rice was originally found in relatively small areas of central Thailand. In the early 1970s, when the government launched an agricultural development plan, this rice variety was introduced to farmers in various parts of the country for testing. It was found that Hom Mali grown in the northeastern region yielded the highest quality preferred by the upper export-oriented market: long grain, pure white, silky smooth, soft, and aromatic.

Northeast Thailand accounts for approximately one-third of the country's area and population. Most of the population is engaged in agriculture, and farming is carried out on a small-scale basis. This region remains relatively poor due to a number of environmental problems and constraints.

Infertile soils and erratic rainfall, for instance, result in low agricultural productivity of land. Because of this, there are not many agricultural alternatives for farmers. Among the limited alternatives, Hom Mali is considered one of the most promising as it yields the highest quality product when grown in this region. At present, two-thirds of Hom Mali's production area and total production are in the northeast. It is reported that, if managed properly, this crop can bring very high benefit to the farmers.

Despite its high quality, at present, a major drawback to this rice is its relatively low yield. In general, in the northeast, Hom Mali yields 2 tons a hectare, while normal long grain rice grown under appropriate cultivation practices yields more than 2.5 tons a hectare. Thus, attention has been paid primarily to the determination of more appropriate cultivation practices to raise crop yield under the different agro-ecological conditions of the region.

In addition to the crop yield, there is another aspect that is also very important: the aroma. Hom Mali's aroma is unique and a major characteristic that makes this rice famous. Currently, there is insufficient research focusing on this characteristic. Factors affecting Hom Mali's aroma are not well understood. With sufficient knowledge on this aspect, Hom Mali rice production in NE Thailand will be much more beneficial to the farmers as well as to the country as a whole. (Visiting Research Fellow)

POETIC KYOTO

By Mohamad Haji Salleh

Literature is part of the great communicative network of human communities. Based on the great language of experience itself, it expresses the core and periphery of human emotions, thoughts, and ways of life that over years have shaped a people's identity.



Contemporary developments in Southeast Asian societies, unfortunately, have tended to marginalize this very network and thus also marginalize the soul it has created for them. Even in a global village, this soul and identity are important for the health of a people, especially one finding its way in the confused present.

As I read Japanese literary works (some of them again, like the *Genji Monogatari*) and as I look around Kyoto, with the gentle guidance of Nishimura-sensei, a conscien-

tious seeker, I also find a model of a developed nation, industrialized but not marginalizing its soul or literary genius. This is a city that is not only proud of its brassiere company but also of its temples and its literary past. Here one is always reminded of *Genji Monogatari* -- the Shimogamo Shrine, the Nonomiya Shrine, the Rozanji, where Murasaki Shikibu wrote, her grave, the Uji Museum by the wild beauty of the Uji river, the cold carrier of Ukifune. In the northern village of Ono, we hear she was given a new lease of life, though a life that rejected the futile play of human emotions.

Next to the Shimogamo Shrine is the house where Kawabata lived in a quiet style to write his *Koto* (The Old Capital). Not far from the University is the exhibition hall, where for the first time, I set my eyes on the manuscripts and pictures of the frail Nakahara Chuya.

In a small hut in Arashiyama, Basho once visited his friend. He is immortalized in the little exhibition there. All over the city one finds poems by famous poets like Ono no Komachi, Basho and Izumi Shikibu engraved to accompany the stroller or to urge him to enjoy the beauty of nature and its impermanence.

Golden's *Memoirs of a Geisha* takes me deep in the tea-houses of Gion and the beauty of the *maikos*, suffering and celebrating their lives.

The Southeast Asian city seldom has markings or reminders of its authors. Their wooden houses might have been replaced by modern, often faceless buildings, but all the reminders of their presence are gone. There are no markers on houses as in Kyoto, or London, which pride themselves on the many writers who thought and wrote there.

We can learn from Kyoto of a pride in things that are at the core of a people's life, thoughts and emotions. We also can learn from Kyoto the beauty of being over selves and the celebration of our own achievements, in a situation when they are so easily forgotten.

(Visiting Research Fellow)

AGRICULTURAL LAND USE IN INDONESIA: COASTAL GEOGRAPHICAL INFORMATION ASSESSMENT

By Aris Poniman Kertopermono



Indonesia consists of about 17,000 islands, many of which are small and still uninhabited and unnamed. Indonesia is the largest archipelagic nation in the world. It has a combined coastline of over 81,000km. Moreover, it is the home of various

groups of people who practice different styles of agricultural land use. As underscored by the national motto "Bhineka Tunggal Ika" or "Unity through Diversity," ecological, social, cultural and historical diversity is one of the most prominent features of Indonesia. Because of its geographical position, in the past especially, Indonesia was subject to many different cultural influences. Nowadays, these features, especially as reflected in the traditional agricultural land use, are more likely to become "new resources" than problems. After the economic and political crisis in Indonesia, it is time to look again at the indigenous knowledges that are in danger of being forgotten.

Many kinds of traditional-indigenous agricultural cultivation, however, have already fallen into disuse. This is because of the strong influence of "advanced" technology, particularly since the green revolution. Fortunately, many areas and groups of people have not yet been touched strongly by these influences. Thus there is still a chance to take inventory and make an evaluation of traditional-indigenous agricultural land use and maricultural sea use both systematically and extensively through these areas.

Geographic descriptions related to existing agricultural coastal land use in Indonesia are needed. These types of geographic information, synthesized with other layers of the thematic database, will be useful for the development of integrated coastal zone management. One of the survey methods which have been developed is as follows. Basically, an extensive survey can be developed which covers a wide area. Geographical background is needed to do this type of survey. Because of the geographical diversity of Indonesia, this survey has very high flexibility in terms of field observation, interviewing, and time scheduling. These depend on local ecological and cultural conditions.

The gathering of information before visiting a site -- such as literature, topographical and resources thematic maps, remote sensing image interpretation, and statistical data -- is of course very important. Application of the thematic database of GIS (Geographical Information System) can also be used. But other important factors are: direct observation in the field, analysis and synthesis of ecological backgrounds, interviews to obtain information on the oral historical background and local traditional-indigenous land use. Informants are usually chosen from among the old people who are experts in local traditional agriculture and who have knowledge of the oral historical background. Information is recorded through interviews with farmers or fishermen in their fields or their homes. The survey method is usually called multistage survey. Multi-temporal and multistage survey are conducted to obtain spatial-temporal information. Aneco-historical approach is applied. This approach is sometimes called the spatio-temporal ap-

proach. Comprehensively, it can also be called a geo-eco-historical approach.

An important task, but one that is sometimes not so easy to realize, is the integration of data and information both either obtained from remote sensing images and direct field surveys. Another is that of communicating and integrating both the top-down and bottom-up information. Alternatively, if we wish to avoid the terms top-down and bottom-up, the task is to develop integrated information from local and "national-regional-global" knowledge.

This type of information can then be used to improve the knowledge on coastal agricultural land use, which may be useful for government, planners, local communities, interdisciplinary scholars, and other stakeholders with an interest in integrated coastal zone planning and management. This information will also be useful for environmental global assessments. After we have enough knowledge of the pattern of local agricultural land use, we can use remote sensing multi-temporal images to analyze and evaluate land cover changes in relation to the land use transformations. For example, in the wetland of the eastern coast of Sumatra, we can distinguish clearly the tidal land use pattern of Banjar people from South Kalimantan or Bugis from South Sulawesi from the tidal land use prepared by the government for transmigration, or from the land use of local people. The conversion of forests into "modern" plantation areas, mangroves into fishponds can also be detected.

Land cover is one of the main thematic layers that can be produced globally or locally depending on the remote sensing images used. The distinction between land use and land cover is important for defining properties of natural and managed ecosystems and their responses to global or local changes.

Land cover refers to the actual character of the surface of land and is normally defined by the upper soil layer and the vegetation, while land use refers to the purpose to which humans put land and its land cover (Turner *et al.*, 1995). Human activities have modified and will continue to modify both land cover and land use. The combination of natural vegetation and human land use thus establishes the actual land cover pattern in any area.

Land cover is a dynamic layer of GIS, while landform is relatively more static. In coastal areas, however, the other important factor is geographic information on the changes of sea cover. This is a more dynamic layer. Periodically, we have to continue to build the thematic database of national, regional and local geographic information to improve our knowledge of the relationship of the land, coastal and marine environments with human activities.

(Visiting Research Fellow)

THE IMPACT OF INFORMATION TECHNOLOGY ON THE CULTURE CHANGE IN THAILAND

By Vasin Chooprayoon



At the end of 15th century, Johann Gutenberg successfully invented the first movable-type printing machine, which published the first book, The 42 Line Bible. Because of this, printed materials were widely disseminated and published in great numbers later. It was an important changing point in world civilization, particularly information culture. In the 20th century, our world underwent an information technology revolution; we have had variform intelligent tools which reflect mankind's intelligence miraculously. From the invention of the telephone by Alexander Graham Bell to the innovation by Mauchly and Ackert of ENIAC (the first computer); the development of the microprocessor and the productivity of the 4th generation language of computers to the Internet, a network of networks; through the Microsoft of Bill Gates, technological developments have absolutely destroyed the borders of our countries. Network technology has become an important factor in these countries. We are connected together by the network capacity, which determines the pattern of life in the wave of information society. We are running on the information superhighway and changing the pattern of our life, and adapting or matching our local culture to western culture. We are in future shock and under media power.

Thailand, at a glance, well-known as a free country, never a colony of the western world, is a land of smiles and gentleness. During the 80s and the 90s, the storm of information technology attacked Thai society suddenly and the information explosion from the west flowed continuously into the smiling land. What happened after that? Transnational companies have emerged like growing bean sprouts. We witness the expansion of mass media; the free market policy of the government; the rapid change of technology; and so on. These have significantly influenced Thai life. How should Thais respond?

Sabai sabai (to be simple) is a conspicuous Thai habit, and Thai people are not sure how good or bad it is. They readily open the door of the nation to westernization. They accept the western culture through many media without critical consideration of both information technology literacy and information literacy, especially in Bangkok and the city areas of other provinces. The digital mass media

such as the Internet, television and radio broadcasting, cable television, satellite television, and wireless phone have socialized the new Thai generation. This younger generation is strongly influenced by the media to consume current fashions. They usually consider only the exchange value when they want to buy something; at the same time, they never consider its utility value.

Thailand now has a high technological gap between urban areas and rural areas. While urban people are enjoying information technology, rural people are not. They have different incomes. A few companies have monopolized the information technology industry in Thailand, and have played important roles in every area of Thai life. The advanced technology of those companies has added value to all their commodities; meanwhile, the value of Thai people, as human beings, is diminishing in proportion to the value of those commodities. However, information technology is an important channel of communication -- we need the optic fiber when we send messages. Messages from around the world flow into Thailand at all times. Thus, Thai people must learn how to use information technology in an appropriate way. Information technology has unavoidably impacted on current Thai culture.

Digital cooking has begun to replace Thai traditional cooking. Digital cooking machines become a gauge of the modern Thai quality of life. This is unavoidable. Everyone tries to balance a comfortable life with problems like earning money and enduring rush hours. They enjoy using a digital rice pot, a digital microwave, a digital stove, a digital juicer, and so on. They always cook with instant food powder and instant noodles. They are forgetting the art of Thai cuisine, which was created by their ancestors hundreds of years ago.

Thai adolescents are easily stimulated by digital media and have become the target group of business companies. The variety of famous brand products from abroad comes to them like a rainstorm. They willingly accept those products without condition because they want a new look. If you go to universities in Thailand, especially private universities, you will find students with name brands: dresses by Versace or Berluti or Christian Lacroix, cosmetics by Clinique, handbags by Louis Vuitton, watches by Rolex, and perfumes by Christian Dior. They always drive new versions of luxury cars, eat hamburgers by McDonald, talk busily on high-tech mobile phones, and want to have further education abroad. Their parents do not devote enough time to them and they become spoiled. These parents always concentrate on their business at all times. It is a sad movie in which Thai society is falling into confusion.

Because of the changes in the information explosion, Thai people are now paying for information in the economic sector which ten years ago they could obtain free.

Thai society begins to define information as public goods, which everyone can access 24 hours by paying connection fees. Information becomes an asset of organizations and plays important roles in national development in many ways: industrial sector, agricultural sector, national resources, human resources, etc. Many information units appear in the society such as NECTEC, Internet cafés, digital libraries, online magazines, online newspapers, online courses, shopping online and other special information centers. Franchise book stores and IT stores are expanding rapidly including computer schools and English teaching schools. However, Thai people still lack strong reading habits.

Finally, I can not predict what will happen in the future in Thai society. I know only that if the present trend continues, Thais may lose both independence and identity because westernization, expanding through all media, is not different from the colony hunting of the western powers in the past. That means neo-neo colonialism in the world of globalization. Thais, are you awake to this situation?(Visiting Research Fellow)

研 究 会 報 告

Special Seminar (於センター)

11月11日 W.M.H. Jaim (バングラデシュ農科大学) Flood and Stability of Bangladesh Economy 11月15日 Leo Suryadinata (センター招聘外国人学者) The State and the Ethnic Chinese Minority: A Comparison between Indonesia and the United States 11月18日 Edward Poelinggomang (センター外国人研究員) Maritime Trade in the Eastern Part of Indonesia 11月24日 Sriprapha Petchamesree (センター招聘外国人学者) The Economic and Political Development of Vietnam after Doi Moi (Economic Reform) 12月15日 Julaporn Euarukskul (センター招聘外国人学者) Thailand after the Crisis: Implications for Security and Foreign Policy 12月20日 Patma Vityakon (センター招聘外国人学者) Sustainability of Agricultural Land Use in Northeast Thailand: The Role of Soil Organic Matter

東南アジアの自然と農業研究会

第93回例会：12月17日 関 良基 (京大農学研究科) 「フィリピンの商業伐採跡地をめぐる土地・資源問題 -- 政府の森林管理戦略と山地住民の生存戦略」

第94回例会：2月18日 福井捷朗 (センター) 「アンコールは水利社会だったか？」

第95回例会：3月10日 生方史数 (京大農学研究科) 「社会経済変化とユーカリ農家林業 -- タイ東北部の事例から」

第96回例会：4月21日 星川圭介 (京大農学研究科) 「東北タイにおける稲作と伝統的井堰灌漑 -- 形態と位置付け、そしてその変遷について」

"Nation-States, Indigenism and Citizenship in Southeast Asia: Some Preliminary Thoughts" by *Leo Suryadinata*, November 25, 1999.

Southeast Asian countries are new states and they are multi-ethnic states rather than "nation-states." There is always a possibility of disintegration. Not surprisingly, nation-building has been the primary task of each government in order to hold the multi-ethnic society together. However, the definition of nation and the strategy of nation-building differ from state to state, depending on the history and ethnic composition of the country, as well as the nature of the state. The ethnic compositions of Southeast Asian states differ but there is a presence of both homeland and non-homeland minorities (e.g., Chinese and Indians), and policy towards these minority groups is not the same. All states but one are "indigenous states" and hence nation-building was along the lines of an indigenous nation rather than an immigrant nation. Indigenism has become an important principle, which has also spilled over into citizenship rights. Indigenous citizens have more rights than non-indigenous ones, challenging the concept of equality in citizenship.

With regard to government policy, the political system -- whether it is authoritarian or democratic -- also has a bearing. It is more likely for authoritarian governments to introduce a forced assimilation policy, while more democratic governments favor cultural pluralism but not ethnic/racial segregation. Nevertheless, the end of the Cold War and the democratization process pose a challenge both to nation-building and citizenship. The new era gave rise to concerns about ethnicity and human rights, which has made rigid nation-building more difficult and discrimination in citizenship regulation less acceptable.

"Applications of Remote Sensing and Geographic Information Systems for Land Evaluation in NE Thailand" by *Roengsak Katawatina*, January 27, 2000.

The objective of this talk is to present some examples of the use of remote sensing and geographic information system technologies for agricultural and non-agricultural land evaluation in Northeast Thailand. This talk deals with four topics: (1) land evaluation for dry season peanut cropping using crop modeling and remote sensing in a geographic information system, (2) mapping salt affected areas using satellite data, (3) mapping paddy fields using remotely sensed data, and (4) land evaluation for sanitary landfill.

The first topic concerns the use of a validated crop model to simulate yield data of dry season peanut crop. It also covers the generation of land suitability maps for this cropping, based on the simulated data, in a geographic information system (GIS). In addition, the application of remote sensing to obtain supplementary information on the existing crop covers at the beginning of each dry season is also described.

The second and the third topics briefly discuss the applications of different remote sensing techniques to map salt-affected areas and paddy fields, respectively. The last topic deals with the use of a GIS in land suitability classification for sanitary landfill based on criteria related to land use/cover, soil, topography, and water resource.

"Agricultural Land Use in Indonesia: Coastal Geographical Information Assessment" by *Aris Poniman Kertopermono*, January 27, 2000.

This talk deals with coastal geographical information assessment related to agricultural land use in Indonesia. The existing maps, remote sensing and thematic database of GIS, and field notes from various sources, including geographical information from the Web are briefly evaluated and discussed. I hope that this research can be developed as one of the activities to realize the long-term vision in establishing a reliable national geographical information system in Indonesia. All thematic data should be put on the standard base maps. Our groups in Indonesia have been developing basic thematic maps, natural resources balances, spatial thematic databases, and modeling for regional geographical potential assessment either in small scales (1:2,500,000; 1:1,000,000; 1:250,000) or medium and large scales (1:50,000; 1:25,000). Some examples of geographic information include: land use: slope: regional spatial planning: Landsat TM image of West Java Province, using downloaded data from the Internet, www.signas.or.id; Maps of Kupang Bay, East Nusa Tenggara Province (MREP, Marine Resource Evaluation and Planning, Part A and Part B). I compare the mangrove and coral reef map produced by Bakosurtanal (National Coordination Agency for Surveys and Mapping) with the mangrove and coral reef map produced by WCMC (World Conservation Mangrove and Coral Reef). Application of multi-temporal remote sensing and GIS for agricultural land use on the eastern coast of Sumatra, where the transformation of natural wetlands to tidal agricultural land use has occurred extensively, is also discussed.

Colloquium

Northeast Thailand is known as a typical "rain-fed" rice area. Archival materials and interviews with village elders, however, indicate that "rain-fed" rice land began to appear only around the mid-20th century, until which time most rice lands had been irrigated by a kind of storm-flow diversion system. This system consists of a higher-than-bank earthen bund, called *tham nop*, across a stream, which diverts intermittent storm-flow into adjacent rice fields. The almost ten-fold increase of rice area during the last

100 years was achieved mostly by expansion onto higher ground that cannot be irrigated by this system. As a result, the average yield of rice of the region declined, and the production stability also probably deteriorated. It also made the *tham nop* system ineffective and insignificant. First, the stream flow was much reduced due to the declining run-off ratio caused by greater retention of water upstream by banded "rain-fed" rice plots. Second, the bottom land irrigated by the *tham nop* system came to constitute only a small portion of total area under rice. Third, economic development caused the shift of farmers' priority from food security to profitability.

センター人の動き

西淵光昭 (10月1日～14日) マレーシア「腸管感染症に関する共同研究と病原細菌の検出法に関するワークショップ出席」 藤田幸一 (10月4日～13日) タイ「タイ中部・北部の農業生産動向に関する調査等」 白石隆 (10月5日～17日) オーストラリア、シンガポール『公共財の政治学』会議出席及びラッフルズ関係文書閲覧収集 阿部茂行 (10月7日～11日) タイ『タイ経済危機と国際支援』について意見交換 山田勇 (10月8日～27日) 中華人民共和国『生産資源の在来性と開発』調査のための研究ネットワーク構築 林行夫 (10月11日～20日) 同『西南中国・東南アジア大陸部における民族間関係と国民国家』研究集会出席 西淵光昭 (10月14日～17日) 韓国「韓国食品安全学会の主催国際シンポジウム出席」 安藤和雄 (10月17日～27日) タイ、中国「COE 関連の研究者間ネットワーク構築」 藤田幸一 (10月20日～30日) ミャンマー、インドネシア「ミャンマーの農産物需給、農業政策等の現状及びAFTAの現状調査」 阿部茂行 (10月24日～30日) シンガポール、マレーシア「アジア研究ネットワークについての意見交換」 河野泰之 (10月26日～11月27日) タイ、ベトナム「農業資源評価のための現地調査」 柳澤雅之 (10月30日～2000年1月31日) ベトナム、スリランカ「ベトナムの農業システム及びスリランカ農業技術に関する調査研究」 田中耕司 (10月31日～11月13日) ラオス『異生態系接触に関わる人口移動と資源利用システムの変貌』調査 立本成文 (11月1日～19日) トルコ、オーストラリア、シリア「伝統的市場の比較研究調査」 山田勇 (11月6日～11日) マレーシア『東アジアにおける地域の環境に調和した持続的生物生産技術開発』の現地調査 石川登 (11月10日～12月10日) インドネシア「センタージャカルタ連絡事務所管理運営及び植民地関係資料収集」 藤田幸一 (11月16日～12月20日) インド、バングラデシュ「管井戸灌漑の効率性と灌漑導入に伴う社会経済変化に関する実態調査」 海田能宏 (11月16日～12月24日) パキスタン、インド、タイ他「アジア・エコテクノロジー・ネットワークの構築に関する調査研究」 白石隆 (11月22日～12月10日) タイ、インドネシア『ヘゲモニーとテククラシー』の調査並びに『インドネシアの政治文責』の情報収集 P.Abinales (11月22日～12月10日) タイ「ヘゲモニーの構造変化(ネットワークの比較史)に関する資料収集」 安藤和雄 (11月24日～12月21日) バングラデシュ、ラオス「図書資料購入準備とネットワーク構築に関する研究打合せ」 福井捷朗 (11月29日～12月18日) タイ『東南アジアにおける半乾燥地の発展と停滞』に関する研究調査 田中耕司 (12月1日～21日) ベトナム、インド「アジア・エコテクノロジーフィールド・ワークショップネットワークの現地調査」 西淵光昭 (12月2日～7日) アメリカ合衆国「アジアにおける腸炎ピブリオ感染症の大流行に関する共同研究」 杉島敬志 (12月2日～2000年3月10日) インドネシア「東南アジアの親族構造に関する研究調査及びセンタージャカルタ

連絡事務所管理運営」 P.Abinales (12月18日～2000年2月12日) フィリピン、マレーシア「アメリカ植民地に関する共同研究打合せ」 福井捷朗 (12月24日～2000年1月20日) タイ、カンボジア『東南アジアにおける半乾燥地の発展と停滞』に関する研究調査 河野泰之 (12月25日～2000年1月20日) カンボジア「同」 阿部茂行 (2000年1月5日～12日) アメリカ合衆国「COE 推進計画の研究者ネットワーク構築について」 林行夫 (1月6日～15日) タイ「タイ系諸族をめぐるローカリティと民族間関係に関する資料収集」 C.Hau (1月9日～2月16日) タイ、フィリピン「ヘゲモニーの構造変化(ネットワークの比較史)の調査」 西淵光昭 (1月10日～20日) タイ「腸管感染症原因細菌の動態に関する調査」 阿部茂行 (1月19日～23日) 台湾「通貨危機に対する早期警告システムについての国際会議での論文発表」 石川登 (1月24日～3月18日) マレーシア、シンガポール「東マレーシアサラワク州における移動と文化編成に関する現地調査」 阿部茂行 (1月28日～2月10日) タイ『国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済』に関する研究打合せ 田中基久(文部省)、西尾修(同)、伊東成治(京大経理部) (2月1日～10日) インドネシア、タイ「東南アジアにおける大学運営及び施設に関する実情調査並びにセンターバンコク・ジャカルタ連絡事務所管理状況視察」 林行夫 (2月3日～3月23日) タイ、ラオス『ラオス社会における移動と文化再編』に関する調査 水野広祐 (2月5日～23日) インドネシア『環境調和型農業発展に関する社会経済的研究』に関する調査 白石隆 (2月20日～24日) シンガポール『歴史と記憶』会議出席 五十嵐忠孝 (2月20日～3月19日) インドネシア「在来暦法に関する現地調査」 山田勇 (2月21日～24日) インドネシア『アジア太平洋地域の森林収穫コードの実施適用推進の訓練戦略』に関するワークショップ出席 P.Abinales (3月1日～12日) フィリピン、タイ「拠点大学交流セミナーへの出席等」 河野泰之 (3月3日～25日) ラオス「東南アジア大陸部の環境ストレスと農村社会経済変容を考慮した土地生産力評価の現地調査」 藤田幸一 (3月5日～25日) 同「同」 柳澤雅之 (3月5日～25日) 同「ラオスの農業・環境に関する研究情報と資料収集」 足立敏、宮田浩行 (3月6日～12日) タイ「拠点大学交流セミナー事務及び学術交流事務打合せ」 阿部茂行 (3月6日～12日) タイ「拠点大学交流セミナー出席」 海田能宏 (3月7日～21日) ボリビア「ボリビア中・高地の農村環境及び農村開発に関する調査」 樋口浩和 (3月7日～5月18日) タイ「タイにおける樹木作物の栽培と利用に関する生態学的研究」 西村重夫 (3月8日～4月12日) インドネシア「センタージャカルタ連絡事務所管理運営及びインドネシア国民教育に関する研究調査」 白石隆 (3月8日～14日) タイ「拠点大学交流セミナー出席」 山田勇 (3月15日～31日) 中華人民共和国「生態資源利用等調査及びネットワーク打合せ」 阿部茂行 (3月17日～4月15日) 同『日本経済』に関する講義及び資料収集 田中耕司 (3月24日～4月6日) インドネシア『沿岸部農漁村開発』に関する共同研究 立本成文 (3月25日～31日) 同「長・中期的研究のネットワークの開発」

黒田 景子

バンコクオフィスへやってくる日本からの訪問者の中で、今年印象に残ったのは、公私をとわず、または調査、観光目的をとわず、ラオスあるいはカンボジアへの訪問予定者の多さであった。ラオスに関しては国内交通の不便さもあってそれなりの準備が必要ではあるが、カンボジアに関しては、在住日本人相手の旅行社からの案内にも手ごろな観光地としてあげられることが多くなっており、中には一泊二日のアンコールワット旅行や、プノンペンでのゴルフツアー付きアンコールワットツアーなどというものまで登場するようになった。

1999年12月5日の国王誕生日に高架電車が開通したバンコクは中心街の商業地区間を結ぶ交通手段が登場したことで、ますます「中産階級」的都市指向が顕著になってきたように思われる。現在の経済状況がどうであれ、93年頃に計画された観光や地方振興策が具体化されてきたのはこの2年程のことであり、タイ人向けの雑誌にもアジアンティストを強調したインテリア、ガーデニングなどの記事、観光案内の記事があふれるようになった。その一方で地方農村の窮状を訴えるために上京してきた農民の大集団が高架ガード下にテントを張って座り込んでおり、建設途中で放置されているビルの奥には、バンコクに入ってくることを禁じられている象と象使いたちがひっそりと隠れずんでいる。これらの象達は夜、観光客相手にエサを売って露命をつないでいるのである。象の数、水牛の数はともに農村では激減しているときいた。

地方では3桁番号の国道の拡張舗装工事が盛んになっている。道路脇の水路を埋め立てた幅数十メートルに及び高速道路が農村を貫いて走り、風景を変えていく。筆者が研究対象としている南タイは、タイ人向けの観光案内でもダイビングやリゾートホテルなどが売り物となっており、外国人向け観光案内の後追いの後追いの後追いである。遺跡はあまりにも奇麗に公園化してしまった。それでも、こういう文化事業が着手されるようになったのは確かに90年代前半の好景気のおかげであるにちがいない。

また、国王72歳の祝賀事業として、『タイ文化事典』全43巻が企画された。すでに発刊されたのは東北タイ部15巻と南タイ部18巻である。南タイ部は15年前の『南タイ文化事典』を下敷きに大幅に写真資料や解説を増補し、驚くべき情報量を誇る。南タイの特色であるマレー的ムスリム文化に多くの紙面を割いた結果、マレーシアの文化事典よりもいっそう「マレー的」な文化の解説書となったことは皮肉であろうか。(センター客員)

連絡事務所だより

杉島 敬志

早いものでジャカルタ連絡事務所へ赴任して3カ月になるろうとしている。私の本務校は国立民族学博物館だが、おなじ文部省の研究機関でもいろいろ勝手がちがう。ましてやジャカルタ連絡事務所の管理運営をおこなうとなればなおさらで、連絡事務所委員会のメンバーには初歩的な質問をして教えを請うてきた。

そのときにかかせないのがEメールである。また、現在ではファックスさえなかった十数年前とはことなり、パソコンと接続できる携帯電話もある。その結果、連絡事務所の管理運営はセンターの教官、事務官との緊密な連携のもとにおこなわれており、毎日のように「あれしろ、これしろ八代亜紀」の業務依頼が送られてくるが、それらをすぐに印刷して保管しておくためのプリンターも必要である。

しかし、こちらに赴任した当初、プリンターは紙を一枚ずつ手差ししなければならぬ古代の遺物だった。また、パソコンは動きがおそく、会計ソフトを使うと計算終了までに何分もかかるような代物だった。これではやっていられないと泣きつき、このたびようやく新しいプリンターとパソコンを導入することができた。いまはそれを使って仕事をしている。両者とも高速で動き、イラチな私を満足させている。

だが、Eメールとなると話はべつである。これまで、Eメールにまさる通信の手段はないと思っていたが、それはLANの内側で甘やかされていたことに由来する幻想だった。昼間はプロバイダーに接続することさえむずかしい。また、ようやくログインしても、送信はまだしも、受信はしょっちゅうストップする。こうした状態は夜の10時をまわってもさほど好転しない。したがって、Eメールの送受信を効率よくおこなうには真夜中から明け方にかけて仕事をするほかない。しかし、この時刻でも添付ファイルのついたメッセージがひとつでもあり、一回で受信に成功するとはかぎらない。

こうして、Eメールに多くを依存する駐在員の仕事は荒れ味のものになるが、それでも余禄はある。それは仕事をしながら連絡事務所の番ができることである。ジャカルタの治安はよくない。とくに雨の降る夜は危険とされ、二週間ほどまえの大雨の夜には門の南京錠がこわされ、以前には夜間に電話線を切られることもあった。携帯電話、懐中電灯、棍棒を机のわきにおき、窓の外には二匹の番犬をはべらせながら、雨季のジャカルタの夜をすぞす毎日である。(センター客員)

もちつき



安藤和雄助教授らの呼びかけで、2月8日センター北棟玄関前で寒餅つき親睦会が開かれた。何が始まるのかと興味津々の外国人研究者も交え、センターとA・A研究科の職員、院生らが、寒風に震えながらも、杵をふるい、餅をまるめた。

2000年5月1日発行
 発行所 〒606-8501
 京都市左京区吉田下阿達町46
 京都大学東南アジア研究センター
 Tel (075) 753-7300
 Fax (075) 753-7350
 e-mail: director@cseas.kyoto-u.ac.jp
 発行 立本 成文
 編集 石川 登・米沢真理子